

ハッキリ言ってしまうのであれば、未那月美紀みなつきみきという人間はかなり意地悪な性格をしていると思う。彼女は、陽真里ひまりの調査を「神室かむろくんには出来ない任務」だと断言したのだから。

夕星ゆうせいはA R A sエリアスの誰よりも陽真里のことをよく知っている。だから彼女のプライベートルームを見れば、何かおかしな点を見つけ出すことが可能であった。

今の自分には「陽真里が危険なエゴシエーターである」という証拠を見つけることも、その逆に「自分の幼馴染は善良な人間である」と証明することだって出来るのだ。
(ヒバチ……今日お前の元を訪ねたのは、お前が怪獣を生み出すようなエゴシエーターじゃないって証明するためなんだ)

誰にも明かせぬ決意を秘めたまま、夕星は彼女の自室へと通された。

「適当に座って。私は何かお茶菓子と飲み物を探してくるから」

「えっと、俺を部屋に上げたのは説教のためじゃなかったのか？」

「それはそうだけど。私の部屋に上げた以上、夕星はお客さんなの。だったらちゃんともてなさなくちゃ。飲み物はカフェラテで良いかしら？」

「あつ、いや……俺甘ったるいの……」

「格好付け」

彼女がクスリと漏らした。

「本当はブラックコーヒーも飲めないくせに」

それが妙に気恥ずかしくて、夕星の顔はまたも耳まで真っ赤に染まってしまった。

「別に良いだろ！ 甘過ぎるのも、苦過ぎるのもどっちもダメなんだよ！」

「わかった、わかった。貴方の分はお砂糖控えめで作るから少し待っててね。……けど、懐かしいなあ」

「夕星がこうやってうちに遊びにくってくれるのも」と口にした彼女の表情はほんの少し頬が緩んでいるように見えた。

なんだか今日の陽真里は少しフワフワと浮かれている。無防備だったり、急に浮かれてみたりと、年頃の少女というのは夕星にとって難解ものだ。

何を考えているのかイマイチよく分からない。

「それじゃあ、すぐに戻るから。くれぐれも私の私物には勝手に触らないでね」

「へい、へい」

彼女はそれだけ言い残すと、鼻歌を奏でながらにキッチンの方へ行ってしまった。

「アイツ……やけに機嫌が良さそうだったけど、なんか良いことでもあったのか？」
考えたところで、自分に答えが出せるわけでもない。

それに一人きりで取り残されたこの状況は、陽真里のことを調べる絶好のチャンスではないか。

「触んたって言われたが、悪いヒバチ……これも全部お前の疑いを晴らす為なんだ！」

幼馴染の秘密に触れるという後ろめたさと、少しのドキドキを感じながらに、夕星は室内をぐるりと一巡した。

ベットや勉強机のレイアウトは小学生の頃からあまり変わっていないようで、特に目新しい印象はない。それに彼女はものを大切にする方だから、小学生の頃に飾ってあったぬいぐるみやクツションがそのまま部屋に残されている。

「ヤバそうな思想の本とか、怪獣にまつわるあれこれが出てこないだけマシなだけだし……なんつか、面白みに欠けるんだよなあ」

見て取れる限りでもここは、「この世界に怪獣がいたら」と願うようなエゴシエーターの自室に思えない。シャッター音を消したカメラで部屋の写真を収めながら、夕星は思案する。今の自分は裁判で言うところの“弁護側”にきわめて立場が近いのではないだろうか？と。

夕星が果たすべき職務は、「動機」も「凶器」も存在しないことを立証し、被告の濡れ衣を晴らすことだ。

そして、部屋の写真程度ならARAsでも簡単に入手できるはず。それだけでは「陽真里」怪獣を生み出したエゴシエーター」という疑いを晴らす証拠としても弱い。

もっと確信的な証拠が必要なのだ。例えば、秘密の金庫の中。その中からも疑わしきものが出てこなければ、未那月の疑念を払拭する一つの根拠になる筈。

「アイツの秘密の隠し場所が小さい頃から変わってなければ、」

秘密の隠し場所としてまず真っ先に思いつくのはベットの下や、鍵の付いた引き出しの中だ。

だが、夕星は知っていた。幼馴染である彼女が隠し事をするなら、決まってどこを選ぶかを。

「本棚の奥」

巻数ごとに規則正しく整頓された漫画本を、一冊ずつ奥の方へと押し込んでゆく。すると数冊が途中で何かに引っ掛かった。

本を取り出して覗き込めば、そこには不透明なケースが隠されている。振ってみれば中には何かが入っているようだが、

「けど、これはアイツのブラフで」

その辺りをさらに押し込んでみれば、本棚の奥板がズレて、隠しスペースが露わとなった。

陽真里は昔から賢い上に手先も器用な方だった。この程度の工作はお手のものというわけだ。

「ビンゴ！」

夕星が手に取ったのはペンケース程の縦に長い小箱である。中に詰まっているのは、おもちゃの宝石が嵌められたアクセサリや指輪だ。

これはどっちも小学生時代の夕星がプレゼントしたもので、アクセサリの方がお祭りの景品に、指輪は駄菓子のクジで手に入れたものを彼女に渡した気がする。

けれど、こんなチープな品をどうして大事にしているのか？ 今の陽真里ならもっと良いものを購入できるはずなのに。

「……ん？」

やはり自分に女心は分らないと痛感していると、小箱の底の方に何か紙片のようなものが潜ませてあることに気付いた。

それを捲り、夕星はハッとすする。

紙片の正体は短冊を模したメッセージカードだ。きっと陽真里が縦長の小箱を用意した理由は、このカード折り曲げてシワをつけたくなかったからだろう。

それ程まで大切に隠されたカードには「スターレター・プロジェクト」とあった。

「——おともだちが欲しいです。一ねん三くみ・ふじ森ひまり」

今と変わらず生真面目そうに、それでも幼さを残す文字で書かれていた文字の羅列こそが、彼女の「願いごと」であった。



思い出されるのは、過去の記憶の続きだ。

カードに書かれた自分の願いごとに満足した夕星は、担任にメッセージカードを提出しようとして廊下に飛び出して、その途中で彼女を見つけた。

隣の教室で一人ポツンと取り残されているのは、六月ごろに転入してきた少女だ。名前は確か……藤森陽真里だったか？ 中途半端な時期にやってきた転入生だったから、クラスが違う夕星の印象にも残っていた。

「けどアイツ、こんな時間まで残って、何やってんだ？」

俯き気味な彼女の手元をのぞき込めば、そこには一枚のカードがあった。ついさっき夕星が悩みに悩んだ末に書き上げた「スターレター・プロジェクト」のものだ。

「おい、転入生。お前もまだ悩んでんのかよ」

何気なしに声をかけたなら彼女の肩がビクン！ と跳ねた。怯えたように視線を右へ左へと逃し、口元を小さく震わせている。

「俺はオバケか、なんかかよ……」

「そ、その、」

夕星はズカズカと教室に踏み込んで、カードの方に視線を落とす。

よく見てみれば、綺麗な字で何か書いてあるじゃないか。だが、その内容に夕星は思いつきり顔を顰めてしまった。

「おともだちがほしいです」だあ？」

今の夕星であれば、どうして陽真里がそんな願いを抱いたのかも理解できた。

小学生といえど、この時期になれば既に仲良しグループが出来上がっているのだ。後からやって来た彼女が寂しさを抱いて思い悩んでいたと察することも、目元には泣き腫らした跡があったことに気づくこともできたろう。

だが、当時の夕星にすれば、そんなことはどうでも良くて。

せっかく願いが叶うかもしれないチャンスに、彼女が勿体ないことをしているようにしか思えてならなかったのだ。

「なんつーか、もっとババァンって感じに凄いことをお願いすべきだろ！」

カードを取り上げて、吐き捨てる。

「べ、別に良いでしょ！ これが私の願い事なんだから！」

「良くねーよ、こっちはシンセツシンって奴で言ってるのに……だいたい友達なんて簡単にできるもんだろ？」

「出来ないもん！ そんな簡単にできるなら私だって、」

売り言葉に買い言葉だ。それに当時から二人は、揃ってムキになりやすいタイプでもあったのだ。

半ば勢いませの口調で、夕星が言い返す。

「だったら、俺が友達になってやるよ！ それなら、文句ねーよな！」

パチんと彼女が瞬きをした。まるで小さな奇跡が起きたように、言われたことの意味を理解出来てないという様子だ。

「えっ……」

「えっ……、じゃねーよ。俺は神室夕星。嫌だなんて言わせねえからな」

陽真里は数度、その名前を反芻する。「かむろゆーせー」と、幼い口調ながらも、音の響きを確かめるように。

そして、彼女の表情には黄色い華のような表情が咲いた。

さっきまでの内気で陰湿そうな顔はどこへやら。頬は淡く色付いて、夕陽に照らされた瞳が微かに煌めいた。

「ほんと！」と席から立ち上がった陽真里は、嬉しそうに笑ってくれたのだ。



それが陽真里との出会いだった。そこには観衆を満足させるような劇的なエピソードがある訳じゃない。単なる記憶的一幕に過ぎないのだ。

ただ誰かの度肝を抜かずとも、その記憶が夕星にとって大切であるものに変わりない。夕日が照らし出した彼女の笑顔を思い出しながら、夕星も軽く瞼を閉ざした。

「ははっ……そういえば、そうだったよな」

今の陽真里は口煩い幼馴染だが、当時の彼女は内気で寂しがり屋だったのだ。そんな彼女が綴った願いごとのメッセージカードがここにある。

これは充分に「陽真里⇨怪獣を生み出し続けるエゴシエーター」の図式を看破できる物証でもあった。それどころか、当時のカードがここに残されているということは「彼女⇨エゴシエーター」という前提さえも覆すことにもなる。

確か、あの後はカードを提出することも忘れて二人で遊びに出かけた挙句、日が暮れても家に帰らなかったせいで陽真里の母さんに大目玉をくらったのだ。

きつと、そのまま提出期限が過ぎてしまったから、彼女は思い出の品としてカードを小物入れにしまったのだろう。

「このカードを出してないってことは、アイツはそもそもプロジェクトに参加してなかったってことだもんな」

何はともあれ、初めての任務を無事終えることができそうだ。

陽真理はまだ「日常」の側に立っている。という事実には安堵を覚え、夕星はそつと胸を撫で下ろす。

そして、何気なしに振り返り、

「あっ……」

お盆にカフェラテとお茶菓子を乗せた彼女と視線がかち合ってしまった。

手元には小物入れとメッセージカード。探索のために散らかした部屋もそのまま。これでは誰がどう見ても、夕星が現行犯だ。

「ねえ、夕星。私さ、くれぐれも私物には触らないようにって言わなかったわよね？」

陽真里はニコニコとしていた。普段こういふことがあると、すぐにキレル彼女が今回に至っては笑顔を少しも崩そうとしない。

「あっ……ガチでキレてる奴じゃん」

そのことに気付くのと同時だった。お盆を置いた彼女渾身の平手が鼻先を掠める。咄嗟に飛び退かなければ、今頃は頬が彼女の手形に腫れ上がっていただろう。

「危なッ！」

「こら、避けるなッ！」

「無茶言うなって!? だいたい、近頃は暴力系ヒロインなんて流行らねえぞ！」

「なら私が流行らせるだけよッ！」

大胆不敵に宣言した陽真里が再び襲い掛かってくると思われた。だが、変に勢いづいたせ

いで彼女は足を滑らせてしまう。

不慣れなことをするからだ。夕星も彼女を庇うとするも、二人はそのままつれ合うように転倒する。

「痛ってえ……だから、流行らねえって言ったのに……」

ふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐる。すぐ側にあるのは桜色をした彼女の唇だ。それが自分の唇と触れ合ってしまったようなほどの距離にある。

夕星は倒れた拍子に押し倒されるような格好になってしまったのだ。

早鐘を打つ心音はどちらのものか分からない。それでも上になった陽真里の顔は高揚して、耳まで真っ赤に染まっていた。

「ツツ……!!」

彼女は次の言葉を見つけられない。それは夕星も同じで、二人の間には、淡い静寂が訪れる。

だが、そんな静寂が破られるのも一瞬であった——ピンポン、とドアチャイムが鳴ったのだ。

立て続けに奏でられたチャイムは家主を。この場合は陽真里のことを執拗に呼んでいるように思えた。

「わ、私が出るから!」

彼女は身を翻すと、何かを誤魔化すようにして玄関に駆けて行ってしまった。こちらが止める間もなくだ。

「普段ならこれも単なる日常的一幕に過ぎないのだろう。隣近所の来客が尋ねてくるのだって何らおかしいことじゃない。」

ならば、自分はこの尋常ではない胸騒ぎの正体はどう形容すればいいのだろうか？

夕星には幼馴染の開けようとする扉が、「非日常」へと繋がる扉に思えてならなかったのだ。